

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 24 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510262

研究課題名（和文） インドネシア華人の生育地ナショナリズム研究

研究課題名（英文） A Study on “Native-place” Nationalism among Indonesia-born Chinese

研究代表者

貞好康志（SADAYOSHI YASUSHI）

神戸大学・国際文化学研究所・准教授

研究者番号：20314453

研究成果の概要（和文）：インドネシアの中国系住民（華人）の政治思想における特徴的言説—遠い父祖の地・中国でなく、「ここが自分の生まれ育った地だ」との生活実感に基づきインドネシアこそを母国と考えることから、「生育地ナショナリズム」と命名し得る思想群—の系譜に着目し、その生成・発展の過程や、他の諸思想との葛藤の構図、それらの政治・社会的背景と変遷の過程を歴史資料の分析と現地調査を通じて明らかにした。具体的には（1）この思想の先駆と考えられる 1930 年代のインドネシア華人党（PTI）について、（2）1960 年華人の間で起きた「同化論争」の内実について、（3）華人同化主義を国策化したスハルト体制の下での華人社会の実態について、（4）スハルト体制が崩壊した 1998 年以降再活性化した、華人をめぐる新たな議論について、（5）インドネシア独立後に国外へ移住、中国・香港・オランダなどで生活している華人たちの帰属意識について、それぞれ多くの新たな知見を得、複数の論考に纏めた。

研究成果の概要（英文）：This study trails political thoughts seen among Indonesia-born Chinese, focusing the stream that consider Indonesia as their homeland or “native place”, just because they themselves (not their ancestors) were born and bred there. Starting re-analysis of PTI (Partai Tionghoa Indonesia) as the pioneer of the stream in 1930s, the study depicts a genealogy of Indonesian Chinese thoughts on national integration issue throughout 20th century. Among all, the thoughts found at “assimilation controversy” in 1960s, socio-cultural conditions of Chinese society under the Suharto regime, and re-activated debates after 1998(the fall of Suharto) are highlighted.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：インドネシア、華人、生育地ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究を申請したのは、1998年のインドネシア政変（スハルト政権の崩壊といわれる民主化期の開始）からほぼ10年が経過したタイミングであった。「開発と安定」を至上命題に32年間にわたる長期開発独裁を敷いたスハルト体制期には言論の自由を含め国民の政治的権利は抑圧されていた。その中で中国系住民（華人）については同化主義に基づいた政策が取られ、これに反対の声を挙げることは難しかった。民主化期に言論・結社の自由が大幅に緩和されると、華人の間でも国民統合における自分たちの位置づけをめぐる公の議論が「百花斉放」の観を呈した。スハルト体制期の「同化」が概ね否定され、華人の華人性を容認したままの「統合」や「協働」など様々な思潮が知識人や華人団体から提言されたが、事態の急速な進展に学界の方が追いつかず、華人の思想研究は未整理のまま混沌としていた。まして1998年以前の一世紀に及ぶ思想史の展開をふまえ、それらとの関連づけを試みたものはほぼ皆無の状況であった。僅かに、Suryadinata, Lの*Political Thinking of Indonesian Chinese*（初版の副題は1900-1977）の増補改訂版が2002年まで射程を延ばしポスト・スハルト期の代表的言説の断片を幾つか収めて刊行されたが（2005年）、これとて初版以来自ら*Sourcebook*と称している通り、様々な言説の「カタログ」の体裁を出していない。

そのような研究状況に鑑みて、筆者はほぼ百年にわたる歴史的考察を縦軸に、時代ごとの政治・社会・国際環境との相互応酬を横軸に、インドネシア華人の政治思想の諸潮流を有機的に関連づけた研究を目指した。20世紀の政治思想という時、とりわけインドネシアにあっては、植民地支配からの解放と国民国家形成のイデオロギー、すなわちナショナリズムと無縁ではあり得ない。インドネシア・ナショナリズムの「外縁」に位置する華人の政治思想、とりわけインドネシアを自分たちの祖国と捉えそこへの参入を試みた華人たちの運命を辿ることで、単に華人政治思想史を描くのみならず、インドネシア・ナショナリズム「本体」の研究にもつながると考えた。

2. 研究の目的

インドネシア華人の政治思想において、オランダ植民地期以来連綿とみられた特徴的な言説—遠い父祖の地・中国でなく、「ここが自分の生まれ育った地だ」という生活実感を基礎にインドネシアこそを母国と考えることから、「生育地ナショナリズム」と命名し得る思想群一の系譜に着目し、その生成・発展・分岐の過程や、他の諸思想との競合・葛藤の構図、またそれらの政治・社会的背景

と変遷の過程を明らかにすることを、目的として設定した。

その際、インドネシアに生まれ育った華人のうち、同国内にとどまった人々だけでなく、様々な理由で国外（中国・香港・台湾およびオランダ）に再移住した人々の「祖国認識」を探ることを副次的な目的とした。

3. 研究の方法

海外諸地域（インドネシア、中国・香港・台湾・オランダおよび英国）で、華人を中心とするキーパーソンへのインタビューと文献資料収集を行ない、それらのデータを主に日本国内で整理分析する作業を行なった。

このうちインタビューは、インドネシアにおいてはジャカルタでインドネシア華裔協会（INTI）、インドネシア華人百家姓協会（PSMTI）、祖国と民族の連帯（SNB）などの華人組織・NGO指導者、中ジャワ州スマランの和合会館や孔教会学校関係者、中国語学校関係者、中国においては広州中山大学および暨南大学の研究者や留学生、香港ではインドネシア・レストランを営んでいる華人等、台湾ではインドネシア人留学生協会（PPI）の中の華人メンバー、オランダでは1960年代にインドネシアから移住した華人知識人などを主な対象として実施した。

他方、文献資料収集は、インドネシアではジャカルタの国立図書館、インドネシア科学院資料室、中央統計局、NGO拠点コムニタス・バンブーの付設書店、中国では上述の広州二大および香港中文大学、台湾では台北市の商務印書館、オランダでは王立地理言語民族学研究所（KITLV）、英国では大英図書館（BL）などを中心に行なった。

4. 研究成果

（1）インドネシア華人における生育地ナショナリズムの先駆けと位置づけ得るインドネシア華人党（Partai Tionghoa Indonesia）について、Suryadinata博士の研究を超える新たな知見を得た。従来は、同党の初代党首リム・クン・ヒェンが唱えた「インドネシア志向」が、「中国志向」や「蘭印志向」との対比できわめて平板にとらえられていたが、二代党首コー・クワット・チョンらの言動に着目することによって、PTIの中にも様々な思潮が存在したこと、一人の人物を取っても時と場合に応じてその言説は揺れ動いたり変化していることを明らかにできた。例えば「インドネシア民族の中に華人も融合すべき」ことを唱えたリムに比し、コーは華人が民族としては中華民族であることを前提に、西欧の東洋学を経て得られた中国古典思想を人類共通の「普遍原理」に読み替え、華人の支持獲得に努めると共に、植民地支配の基

底にあった「人種原理」を乗り越えようとした。また、PTI にはインドネシア・ナショナリストとの連帯という「横軸」の課題と並び、華人社会内部の階級問題という「縦軸」の課題意識も強かったこと、この点においてコー主導で「中国志向」の旗手と目された新報派とさえ結ぶ動きがあったことなどを明らかにした。これらは独立論考としてはまだ発表していないが、英文 Abstract を送付したことを通じ、Suryadinata 博士の編集にかかる近刊書（後述[図書]の2件目）の中でコーの伝記的研究を執筆することになった（寄稿・校正済み）。

(2) インドネシア独立後、華人をめぐるまず問題になったのは中華人民共和国との間の国籍問題だった。1955年のアジア・アフリカ会議に際した二重国籍解消条約を経て、国籍選択が政治日程にのぼった1960年、インドネシア国籍を得た華人の間で「同化」をめぐる論争がおきた。この論争を、本研究ではPTIの段階で未分化だった生育地ナショナリズムの幾つかの思潮が、冷戦下の政治闘争とも結びついて分岐し顕在化したものだと捉え直した。特に、国軍の支援を得た同化派 Vs 共産党と結んだバプルクイ（インドネシア国籍問題協議体）との闘争の陰で忘却されていた第三の立場が当時の論争においては大きな位置を占めていたことに光を当て直した。この派は、法の下での平等や基本的人権などを説いた弁護士ヤップ・チャム・ヒンに代表され、かつてのコー・クワット・チョンの系譜を引く普遍価値重視の立場と位置づけ得る。

(3) 華人同化主義を独自の論理から国策化したスハルト体制の下で、共産主義者とみられたバプルクイは壊滅、同化派の一部は国策と結びついて体制イデオロギーを担い、第三派は発言を続けたヤップなどを僅かな例外として概ね沈黙・伏流を余儀なくされた。

(4) スハルト体制が崩壊した1998年以降、国民統合における華人の位置づけをめぐる論議が再び活性化した。ただし、同化主義はスハルト体制の抑圧性と同一視されて力を失い、インドネシア式社会主義を処方箋に掲げたバプルクイも復活することはなかった。いまや主流となったのは、「華人が華人であること」を基本的人権とし、同じインドネシア国民として法の下での平等を訴える普遍主義の（つまりPTIにおけるコーや同化論争でのヤップらの系譜を引く）立場である。

(5) インドネシア国外に定住の場を移した人々については、概ね次の事柄を発見した。
①香港では、1950～60年代にインドネシアを出国し、中国経由で再移住してきた世代から

香港生まれの世代に重心が移っているが、彼ら第二世代も「香港人」意識と同時に「インドネシア華人」の出自意識を有しており、家庭内言語としての面でもインドネシア語の運用能力を保持している場合が多い。②台湾のインドネシア華人留学生たちは、ナショナル・アイデンティティの面ではインドネシアを揺るぎない基盤としつつ（その思想的根拠は筆者のいう生育地ナショナリズム感情）、今後の人生の展開の中で有用なスキルとしての中国語を含め、知識・技能や経験、人的ネットワークの獲得を求めて台湾に留学し、その目的を達成しつつある。③1960年代半ばの政変前後にインドネシアから旧宗主国であるオランダに移住（多くは政治亡命）した人々は、当時のインドネシア政府には怨恨の念を抱いているとしても、生まれ育ったインドネシアの地そのものにはいまだに望郷や愛着の情を持っている場合が少なくない。

以上の諸点のうち、(1)～(4)については、第二年度に書いた博士論文中でより詳細に論証した。未公開ではあるが要旨と全文をhttp://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_gakui/D2003163で閲覧可能である。(5)は時間の制約上、この論文には盛り込むに至らなかった。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

- 〔雑誌論文〕（計6件）
- ①貞好康志、「書評：津田浩司『「華人性」の民族誌』、『東南アジア研究』第49巻1号：154-157頁、2011年、査読有。
 - ②貞好康志、「インドネシア華人のコミュニティ団体の変容—スマラン和合会序説」、『国際文化学研究』第37号：54-75頁、2011年、査読無。
 - ③貞好康志、「ポスト・スハルト期インドネシア華人の政治思潮—2002年の『大討論』における主要論者の言説を中心に（後篇）」、『国際文化学研究』第34号：1-22頁、2010年、査読無。
 - ④貞好康志、「インドネシア華人の鄭和信仰」、『季刊民族学』第133号：52-54頁、2010年、査読無。
 - ⑤貞好康志、「書評：相沢伸広『華人と国家—インドネシアの「チナ問題」』、『華僑華人研究』第7号：159-164頁、2010年、査読有。
 - ⑥貞好康志、「ポスト・スハルト期インドネシア華人の政治思潮—2002年の『大討論』に

おける主要論者の言説を中心に(前篇)、『国際文化学研究』第33号:87-109頁、2009年、査読無。

〔学会発表〕(計2件)

①貞好康志、「ポスト・スハルト期のインドネシア華人をめぐって」、日本華僑華人学会年次大会での同題分科会座長としての趣旨説明、2011年。

②貞好康志、「インドネシアにおける華人同化主義の生成と展開」東南アジア学会関東例会、2010年。

〔図書〕(計2件)

①SADAYOSHI, Yasushi, “Ko Kwat Tiong” in Leo Suryadinata (ed.), *Southeast Asian Personalities of Chinese Descent: A Biographical Dictionary*, Singapore: Chinese Heritage Centre (2012年近刊)

②貞好康志、「近現代インドネシア華人研究—現地志向ナショナリズムと華人性」(未公開博士論文)、全330頁、神戸大学大学院国際文化学研究科、2011年。

〔その他〕

ホームページ等

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/aboutus/cha/irprofessor/post-16.html#sadayoshi>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

貞好康志 (SADAYOSHI YASUSHI)

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号: 20314453

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし